

映画にみる「もう1つのマレーシア」

山本博之

マレーシアは、1957年のマラヤ連邦の独立以来、民族間の対立が暴力沙汰にならないよう抑えることに成功してきた。ただし民族間格差の解消は不十分で、2007年にはインド系住民による抗議行動が行われている。独立から50年という1つの区切りを迎えて、マレーシアは民族問題に関してどの方向に進めばよいのか一時的に道を見失ったかのように見える。

国際的に知られたマレーシアの映画監督ヤスミン・アフマド(1958～2009)は、マレーシア社会がこのような方向性を見失っている時にさっそうと現れ、テレビCMや劇映画を通じてマレーシア社会の新しい道を指し示し、そしてあっという間に去ってしまった。

ヤスミン監督は、マレーシア国内ではペトロナスのテレビCMで知られていたが、国外では映画『Sepet』(2004年、邦題は『細い目』)で広く知られるようになった。その後、『Gubra』(2006)、『Mukhsin』(2007)、『Muallaf』(2008)、そして『Talentime』(2009)を発表した。今年〔2009年〕に入り、母方のルーツがある日本を舞台にした次回作『Wasurenagusa』の企画が進んでいると報じられた矢先の7月25日、脳溢血で早すぎる死を迎えた。

ヤスミン監督は、よりよいマレーシア社会を作ろうとする人々の強力なサポーターとして、映画制作を通じて文字通り闘っていた人物だった。ヤスミン作品の多くは、民族や宗教の違いを超えた恋愛を物語の中心に置いている。ただし、それが単なる恋愛ドラマで終わっていないのは、今ここにはない「もう一つのマレーシア」を美しく描くことに成功しているためだ。

ヤスミン作品の魅力は、既成の権力関係を逆転させたマレーシア社会を描いたことにある。デートでは男の子が女の子の顔色

をうかがい、家庭では主人がメイドの指示を受ける。そのため国内の一部の批評家から「マレーシアの現実に即していない」と批判され続けた。しかし、今は現実になくても、現実にあってもおかしくない「もう1つのマレーシア」を美しく描くことで、それが現実になり得ることを教えてくれたのがヤスミン作品だった。

ヤスミン監督のメッセージはマレーシアの人々にしっかりと伝わったようだ。ナジブ首相は、ヤスミン作品を体現したかと思うような「1マレーシア」を打ち出し、民族間格差の解消への協力を国民に呼びかけた。テレビCMなどでヤスミン作品に触れていたマレーシアの人々は、待ってましたといわんばかりにそれぞれの方法で「1マレーシア」の実現に取り組んでいる。

ヤスミン監督は私たちのもとを去ったが、多くの人々はヤスミン監督がまだ自分たちとともにいるかのように語っている。今年8月に行われた第22回マレーシア映画祭では、遺作となった『タレントタイム』に監督賞が贈られた。クアラルンプールのセントラル・マーケットそばには地元の芸術家によってヤスミン監督の肖像画が描かれ、その偉業が讃えられている。日本でも東京や福岡の映画祭でヤスミン作品が上映されることになった。

マレーシア映画といえば、1950年代半ばにデビューしてから1973年に亡くなるまでに60本以上の作品に出演し、35本を監督したP. ラムリー抜きには語れない。それに比べればヤスミン監督は監督作品数が6本ととても少ない。しかし、ヤスミン監督もまた、今後50年間のマレーシアの進む道を示した映画監督としてずっと人々の記憶に残ることだろう。[2009.8.27]

(やまもと・ひろゆき 京都大学)